

音楽監督ジョナサン・ノット

2017年度
シーズンを
語る。

all photos by ヒダキトモコ

2016年10月11日(火)、ミュゼザ川崎シンフォニーホールにて2017年度シーズンラインナップ記者会見を開きました。専務理事・楽団長 大野順二の挨拶に続き、次年度6演目9公演に出演する音楽監督ジョナサン・ノットが自身のプログラミングについて語りました。

即興なくして、音楽はなりたらず。

「本当の音楽作りは即興性がなければならないというのが私の持論です。演奏家と聴衆の皆様の特的な「今」という瞬間を大切にしたいと考えているためです。ですから、リハーサルで方向性は決めるものの、コンサートでは全てを忘れて音楽に没頭します。

音楽作りはこうしたリスクなしには不可能です。そして、聴衆の皆様への反応はコンサート一つ一つによって違います。個人として表現したいことを他の個人に伝えるという試みは、成功することもあれば失敗することもあります。そうした中でも私のやりたいことを感じ取ってくれる楽団員の姿勢に、いつも感謝しています。

5月のブルックナー&7月のマーラー

来年度も「コンサートを通しての旅」というテーマを意識しながら、プログラムを考えました。これらを通して、楽団員とより深く密な関係を築いていきたいと考えています。

将来的にはベートーヴェンやマーラーの交響曲全曲、R.シュトラウスを取り上げてみたいところですが、もちろんブルックナーも大好きですので、来シーズン最初の出演(5月)では《交響曲 第5番》を取り上げます。

かつて、「こんなにもドライなブルックナーがあるのか」と驚くべき演奏を聴いたことがあります。そのときに5番のスコアに向かったのですが、リズムは非常に難しく、対位法も複雑。しかし、なんと美しい曲だろうと思いました。今回はそこにモーツァルトの《ピアノ協奏曲 第6番》を組み合わせています。そして、7月は素晴らしい合唱とともにマーラーの《交響曲 第2番「復活」》を考え、細川俊夫さんの《嘆き》とつないでみました。

変奏曲とBACH(10月)

新ウィーン楽派——いわば古い現代音楽——には、後の時代の作品に比べ豊かなアイデアや音色が含まれています。ただ一つの大きな問題は調性がないという点で、音楽家としてはそこに様々な音色を見出して表現することが重要といえるでしょう。10月は変奏曲というテーマの下、大編成の作品としては初めて12音技法が用いられた、シェーンベルクの《管弦楽のための変